

令和5年度 石川県立輪島漆芸技術研修所運営委員会 議事録

日時：令和5年5月25日（木）

午後1時30分～

場所：輪島漆芸技術研修所 講堂

初めに事務局から委員14名のうち11名の出席、3名の委任状の提出があったため、運営委員会規則第5条第2項の規程により当委員会の開催と議決は有効であることが報告された。

また、委員会の開会を宣言した。

次 第

1. 所長挨拶

2. 運営委員及び職員紹介

3. 議事

市島会長が議事進行することを宣言した。

(1) 研修所現況報告

事務局から、令和4年度事業実績及び令和5年度事業計画についての報告があり、次のとおり質問があった。

〈市島会長〉

オープンキャンパス参加者10名の内訳は。

〈内島教務課長〉

参加者10名のうち6名が専修科へ入学した。10名の年齢層は10代、20代が各3名、30代1名、40代1名、50代1名、60代が1名。

(2) 令和5年度の研修所運営について

事務局から、研修所運営についての報告があり、次のとおり質問があった。

〈室瀬委員〉

特別研修課程が年間180日から200日になった経緯は。

〈内島教務課長〉

小森所長から、これから手仕事をしていこうとする人が長い休みをとるべきではないと提案があり、県に掛け合い、20日間増やすということで予算がついた。

(3) 優品模造制作について

事務局から、令和4年度の優品模造制作（重要無形文化財「沈金」保持者である山岸一男当研修所主任講師による漆象嵌箱「玉響」の榛地・髹漆工程の制作）及び優品調査についての報告があり、次のとおり質問があった。

〈原文化財調査官〉

優品調査の時期について、年度末に実施しているのはなぜか。

〈岩波漆芸技術専門員〉

新型コロナウイルス感染症の影響と、山岸先生の作品が七尾美術館で展示されるタイミングでということで、3月になった。

(4) その他

事務局から、文化財保存事業に係る国庫補助金に関する報告とお詫び、及び来年度の特別研修課程の研修費用について、金粉等材料費の高騰により、教材費を現在の年間7万円から1万円値上げすることを報告した。その後、出席者による意見交換が行われた。

〈事務局〉

文化財保存事業に係る国庫補助金に関して、当研修所は重要無形文化財榛地、髹漆、蒔絵、沈金無形文化財伝承団体として、毎年文化庁より補助金を受け、その運営に充てているが、今般、この補助金の実績報告に際し、提出の遅延並びに度重なる差し替えが生じた。今後、二度とこのような事態が起こることのないよう、①報告書は早い段階から作成し、報告期限は厳守する、②支出根拠資料は執行の都度整理し、実績報告に向けた準備をする、③報告書の作成及び普段の予算執行事務については、担当者任せにせず、研修所全体でチェックする体制を構築する、以上の3点を改善策として、今後実践していく。

〈小森所長〉

この研修所には過去からの修了作品、卒業作品が全て保管されているが、少しでも風通しをよくしたいと思い、昨年度から県の知事室、副知事室2室、議長室の4室に作品を1点ずつ展示させてもらうことになった。その際、作品が展示室や倉庫に入りきらないため、今の倉庫の廊下等に置いてあると知事に申し上げたところ、知事から収蔵庫を作ればとの話をいただいた。今年度から60周年に向けて、実現できる方向に努力していきたいと思うので、皆さんからのご意見を強力なバックアップとしてまた話を持っていきたいと思う。

〈近藤委員〉

収蔵庫はぜひ欲しい。作品は、壊れたら修理はできても、取り返しがつかない。近頃の地震の頻度を考えると、免震のあるものが良い。また、きちんと収蔵できるというのは、活用するために必要なことである。良い作品をきちんと保管でき、月1回でも公開ができるような箱を考えてほしいと思う。

〈増村委員〉

現在の収蔵展示室を大きくするという案もある。必要なときに研究者の人たちがいつでも熟覧できると良い。

隣の漆芸美術館には作品を修復する機能がないので、研修所の中に修復する部屋をつくり、卒業生で修復を勉強した人を担当にすれば、また1つの卒業生の生き方が考えられると思う。今の社会は生産型からサービス型に移行しており、アートの世界でも同じである。サービス型のアートが修復であり、今までの大事な作品を文化財と捉えて、次の時代に残すために傷んだときに修復する機能が必要。輪島は縦割りで、組合は組合で経済産業省の縄張り、美術館や研修所は教育委員会といったように、横のつながりが見えないので、もう少し横断型で輪島の漆を考えていけたらと思う。

〈北原委員〉

最近はやはり保管と公開を両立させる動きがある。県外のお寺でも、これまで収蔵庫がなく、作品の管理に心配があって助言をしていたところ、新しく展示収蔵庫を作って、学芸員も入れて、公開している事例もある。

2月に山岸先生に七尾市の市民講座で講演をしていただいたが、先生のご厚意で、いつもは展示ケースの中で展示している作品を、生で置かせていただいて、制作過程の映像も見せていただいたところ、すごく反響が大きかった。こういうのが七尾市だけでなく、輪島市やほかの市町村にも広がって行って、たくさんの方に漆芸に注目してもらえたらいいと思う。

〈久岡委員〉

現在の生徒数は38名だが、少子化の中で、今後の生徒数の確保について見通しを教えてください。

〈内島教務課長〉

今年度、普通研修課程は入所数が少なかったが、特別研修課程は定員以上の11名が入学している。また、2年生は12名在籍しているので、その卒業生が一定数、来年度の普通課に入学すると見込んでいる。

研修所の発信について、今年度からホームページを充実させようとして取り組んでいる。より若い人に興味を持ってもらえるよう努力していきたい。

〈日南委員〉

先ほど、増村先生から縦割りとの話があったが、現在は漆器組合として、研修所の先生方や生徒と会話をしながら、何かできないかといつも模索している。私も学識経験者として講演をしたり、漆器組合の施設の見学をしたりしている。先日、漆器組合として、輪島塗に携わる人の調査をしたが、10年前に約1300人いたのが、現在は600、700人ほどしかいないということで、研修生にも輪島塗業界に入ってもらえたらと思い、努力している。

現在の輪島塗会館は、昔漆器会館といい、元々は国指定の有形民俗文化財を保管していたところだが、前市長から全て市に寄付すればそれを飾る場所を作るよということで、輪島塗会館ができた。研修生の作品を飾るのも、先ほど言われたとおり、飾りながら収蔵するということを考えてみたらよいと思う。

〈増村委員〉

夏のオープンキャンパスに来る人に、研修所だけ見せるのではなく、組合の協力をいただいて輪島塗そのものを見てもらう内容にしたらよいのではないか。

〈室瀬委員〉

修復については2種類あり、日常使っている漆器の塗り直しと、美術館に入っている美術品、文化財の修復があるが、後者については技術者もいないし、場所もない状況である。通常、漆器は100年200年もつが、やはり定期的にメンテナンスをしないといけない。3年前、首里城が火災に遭い全焼したが、同じ建物敷地内の収蔵庫の中に入っていたものは燃えていなかった。染織品は高温の熱にさらされて完全に硬くなってしまったが、漆器類は温度90度、湿度100%の状況で、一晩で極端に言えば200年300年劣化した。でも燃えていない。だから、修復するとまた展示ができるようになるが、沖縄には修復技術者がいなかった。技術者を育てることと、現物を修理することを同時にしないといけないという状況になって、県や財団が急遽始めたが、それは事故が起こってからでは遅い。そういう意味で、今からやっておく必要があるし、形あるものは絶対に修復が必要なんだということを共有すべきと思う。面白いことに、1度メンテナンスを受けたものは被害が少ない。漆の塗膜というのは、漆固めして吸い込ませるだけで、それだけでその機能が復活するということが、今回実証された。今後、収蔵庫、修復室、展示室はぜひ要望していただきたいし、人材を育てることも重要だと思う。

生徒募集に関しては、ホームページの発信もよいが、今の若い人はほとんどSNSで情報をとる。スマホで20秒30秒作業や材料を撮影してアップするだけで、若い人たちはすごく食いつく。研修所の存在を知らせるために、定期的に発信するのがよいと思う。

〈市島会長〉

金沢市の百万石行列では、百万石情報発信隊というのを募集し、SNSにアップしてもらうことで現場を盛り上げていた。研修所でも、事務局をとおして生徒にアップさせる形をとれば、そんなに難しいことではないのかなと思う。

〈中野委員〉

3年生の卒業制作には金を使わせていただけるようお願いしたい。金の値上がりには僕自身も大変痛手を受けているが、金に頼らず、知恵と工夫を絞って、何とか魅せられるように研修をしていきたいと思っている。

〈室瀬委員〉

私たちが学生するとき、田口善国先生が、複数年続けて銀をベースにした蒔絵作品をたくさん作ってくれて、それがすごく綺麗なデザインだった。講師の先生方も、金を使いたいという気持ちはわかるが、銀の魅力や、銀を使うとこんなデザインができるとか、そういうことが将来的に生徒のデザイン力に繋がると思うので、銀の魅力を出していく指導も必要だと感じる。

〈山岸委員〉

先日、門前高校野球部顧問の山下智茂さんの講演に行き、高校存続のため、どうすれば魅力ある学校にできるか生徒と直談判で話をし、その成果があって今年野球部が一気に増えたという話を聞いた。私も先ほど話に出たように、七尾で講演会をさせてもらったり、増村先生、室瀬先生と東京で実演と講演をさせてもらったりしている。漆をやっている先生方も、歌って踊れる漆芸家にはなかなかないが、何かそういうことを一人一人知恵を出して、若い人と対話するような機会を持つべきだと思う。

金の高騰についても、ここは銀でないと良くなれない、くらいのデザインを突き詰めるといふか、そういう意味では、松田先生の図案日誌の話が今効いてくるのだと思う。技術的にも、材料に関しても、時代は移り変わっていて、何かが必要な気がしている。

〈島崎委員〉

皆さんの話を聞いていて、漆器というのはデリケートで、保存が大変だということをしみじみ感じた。漆器は、お花と同じで人の生活の中で発展してきたものだと思うので、美術館で見るとも素晴らしいけど、生活空間に作品を置いたらどのように映るのかなというのを見たいなと思った。

〈川北委員〉

SNSについて、山中の研修生でも個人的にInstagramに動画をアップしている人がいるが、そのフォロワー数が1万人近くである。研修所も、おもしろいことやっているな、こういうことやってみたいなと興味の湧く発信をすると、海外も含めて、速い情報の拡大になると思う。

材料費について、卒業生の卒業作品の櫨の木地ものを制作しているが、一番立派なものを作りたいということで八寸、約30センチ弱くらいの蓋物が多い。これは作品としてはちょうどよいサイズだが、素材の確保の点からは、大きな木が必要となってくる。木材も値上げしている状況であり、今後サイズ調整をしていただくことになると思う。

〈小森所長〉

今後、研修生を集めるためには、広報がすごく大事であり、輪島の中で横の連携をうまくやりながら発信していく必要がある。研修所ができて50年以上経ち、ある意味ではこの研修所があって、今の輪島が成り立っている部分もあると思う。漆をやりたいと思って輪島を

目指してきた子たちが、少しずつ成長して自分の作品を作りたいというふうに変化していくのは望むべきことだし、一方で輪島の業界に入ろうとしたときに受け入れ先があるのか、また業界の中から研修所を目指す生徒がいるのか、昔と今では研修所の在り様も変わってきていると非常に思う。知事には、60周年の際には、県の美術館と国立工芸館とコラボして、今研修所にある卒業作品を全て展示したいという話をした。今後4年間で何らかの形で研修所の60年の足跡をしっかりと見せて、そこからどうやって漆を発信していくかを考えていかなければいけないと思う。

金粉の値上がりについては、金は金の良さ、銀は銀の良さがあると思うが、金は金である。権六先生がよく言っていた図案日誌の在り様、我々も生徒も勉強しなければいけない。金が足りなかったらどうやったら金以上の効果が出せる図案を作れるのか、アイデアスケッチをいっぱい考えて、年5回の図案コンペにはその中で一番よいものを出す。これでもいい財産になると思う。

今後、輪島市、県、組合さんと手を取り合いながら、商工会議所さんのご助援をいただきながら、4年後の60周年に向けて進めていきたい。

すべての審議が終了し運営委員会の閉会が宣言された。